『信じるとわかること』ヨハネ14:6-11

14:6 イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。
14:7 もしあなたがたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知ったであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を見たのである」。
14:8 ピリポはイエスに言った、「主よ、わたしたちに父を示して下さい。そうして下されば、わたしたちは満足します」。
14:9 イエスは彼に言われた、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか。
14:10 わたしが父におり、父がわたしにおられることをあなたは信じないのか。わたしがあなたがたに話している言葉は、自分から話しているのではない。父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである。
14:11 わたしが父におり、父がわたしにおられることを信じなさい。もしそれが信じられないならば、わざそのものによって信じなさい。

●序論
一冊の信仰書。「あの日、ぼくらは」（語り継ぐクリスチャン実話）。この本の最初に、「天の家」という終戦直後にカナダの宣教師たちが建てた孤児院の物語がありました。
2人の女性宣教師たちを中心に子どもたちと過ごす、戦後最も貧しかった時代、苦労なさる宣教師たちと、子どもたちとの歩みが想像できました。
のちに、この施設は解散し、宣教師たちも帰国することになります。
　戦前戦後の貧しさを抱える日本で、親を失った子供たちと出会って、ただその子供たちを育てるために、多くの苦労をされた宣教師たちを支えたものは、まぎれもない真実な愛に違いありません。

今日イエスさまは、たった１２人の弟子たち。そのうちの一人はイスカリオテのユダ。…でしたが、その弟子たちのことを愛しぬかれたことをこれまで見てきました。
　　13:1 過越の祭の前に、イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。
小さな群れだからダメ、学歴・能力がないからダメ、すぐにつまずくからダメ…という基準からすれば、この弟子たちの中にふさわしい人などいません。けれどもイエスさまの愛は、彼らの不足もすべて覆って、包んで、つくり変えてくださり、父のもとへと引き寄せてくださり、最期には十字架と復活の経験を通して、導いてくださっているのです。　そういう中で、ここで言われました。
　　14:6 …「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。
イエスさまの望みは、そんな彼らがご自分を通して父なる神のもとにたどり着くこと、

神を知ることでした。

●本論
Ⅰ．気づきをうながす言葉がある

14:7 もしあなたがたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知ったであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を見たのである」。

この言葉に反応したのは、ペテロでもトマスでもなく、ピリポでした。彼について…1章でピリポが友人とナタナエルをイエスさまに紹介するときの対話があります。

1:46 ナタナエルは彼に言った、「ナザレから、なんのよいものが出ようか」。ピリポは彼に言った、「きて見なさい」。

このピリポが、今日読んだところではイエスさまの言葉に反応して求めています。

14:8 ピリポはイエスに言った、「主よ、わたしたちに父を示して下さい（見せてください）。そうして下されば、わたしたちは満足します」

その目で見たい、自分の目で見て確認して知りたい。それがピリポの単純な言葉でした。そんな言葉にイエスさまの答えはこうでした。

14:9 イエスは彼に言われた、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか。

その答えは、イエスさまが曰く、「わたしがずっと”一緒にいて”あなたと過ごしたこと、あなたが経験してきたこと、感じたこと…そうして知った”私”が、そのまま答えだ」と言われているのです。そうしてさらにこう言われます。

14:10 わたしが父におり、父がわたしにおられることをあなたは信じないのか。わたしがあなたがたに話している言葉は、自分から話しているのではない。父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである。

もしかしたらピリポが見せてほしいと連想したのは、奇跡？　例えば天がその場で割れるとか…。しかし、イエスさまの言葉は、「見せる」というそれだけのビジュアルな答えを示すのではありませんでした。

先ほど、お話として取り上げた「天の家」という孤児院。そこに集められた個性あるいろいろな子供たちを、宣教師たちは慣れない日本、うまく伝えられない言葉を通して、一生懸命愛情を注いできた様子が、そのつづられた思い出の中でよくわかります。うまく伝えられない、伝わらない言葉を超えて、そこに愛が流れいてたことわかります。

「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。

一緒に過ごした時間が、そして経験が答えとなっていた。そこに一つあなたの応答を加えるだけでいいのだよ…と言われているのです。

14:11 わたしが父におり、父がわたしにおられることを信じなさい。

ピリポが、それをうまく気づくことができなかった…それは、もしかしたらわたしたちの中にもある、鈍感さかもしれません。

「こんなにも一緒にいるのに…、わたしがわかっていないのか」と。　わたしたちにも語られている言葉ではないでしょうか。

Ⅱ．信じたからこそ見える、聞こえる、わかる

14:10 わたしが父におり、父がわたしにおられることをあなたは信じないのか。わたしがあなたがたに話している言葉は、自分から話しているのではない。父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである。

「見れば満足する」という発想は、しばしば私たちが耳にすることです。

「神を見せろ、そうすれば信じる、満足する」というような言葉を聞いたことはありませんか。

霊的な意味で、人は本来「信じて、だれよりも神さまを信頼して、本当の意味で満足する」ように神さまに造られています。実はそういう意味で、人は、神の形に似せて作られた特別な存在なのです。

そうして神さまの喜びを共にすることができる者ともされています。

そういう意味で、わたしたちに神を信頼することが大切だと語るのが聖書です。

信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自分を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。（ヘブル11:6）

生きる力に結ばれていく…。それは「見れば満足す」というのではなく、信じて”生きる”喜びと力を得るものだと覚えたいのです。

さいごに）

最初に紹介した「天の家」という孤児院物語は、施設が解散してバラバラになってはいましたが、それぞれの人生の生きる力と土台となってつながっていたことをが数十年後の２人の回想で知ることができます。

「正直に言えば、辛いことも多くて、何もかもいやになりそうになったこともあるよ。だけど、心の中にあの歌が残ってたんだな」

その歌の一節を聞いて、「ああ私も！」ともう一人の顔も輝く。

「つらい時や疲れた時、一人でよく歌ったわ、その歌。親のいない私のことを愛してくれる人なんか、もう誰もいないんじゃないか、と思っちゃうときにも歌った」。

そう彼らが思い出す賛美は、「主われを愛す」という歌です。

♫

主われを愛す　主は強ければ　われ弱くとも　恐れはあらじ
わが主イエス　わが主イエス　わが主イエス　われを愛す

この賛美は、明治維新後、まだ禁教、迫害の世相が色濃くある中で初めて翻訳された賛美なのです。　あの孤児院出身の人たちばかりでなく、いまだ迫害のもとにあった日本の初期クリスチャンたち、またいろいろな境遇にあった人々が、この賛美で励ましと慰め、癒しと愛の確信、生きる力を回復した…という記録がたくさんあります。

それは、イエスさまが今も「…世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された」(13:1）その事実が、ずっと聞く人々、歌う人々の内に確信となって満たされていくありさまです。

ただ目に見えることを超えたものです。そこで迫害があり苦難があり、苦悩があったにもかかわらず…、生きる力を得たのです。

Jesus loves me, this I know　for the Bible tells me so

イエスさまわたしを愛している。それを知っている。だって聖書がそう私に語ってくれているから！

聖書はイエスさまを語ります。イエスさまの言葉も奇跡も、そしてあの弟子たちの足を洗うイエスさまのお姿も、父なる神さまご自身の思いと愛を表しています。
そして、あの十字架上でわたしたちのためにいのちをも捨ててくださったお姿につながるのです。今もわたしたちを愛してくださっているという十字架の事実に至るのです。

わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。（1ヨハネ4:10）